

【分科会4】

聴覚障害学生支援担当者の役割とは —「見守る支援」の脱構築を目指して—

企画コーディネーター：岡田孝和氏・吉川あゆみ氏・倉谷慶子氏

(関東聴覚障害学生サポートセンター)

司 会：岡田孝和氏(関東聴覚障害学生サポートセンター)

サブ司会：倉谷慶子氏(関東聴覚障害学生サポートセンター)

提 言 者：長野留美子氏(関東聴覚障害学生サポートセンター)

コメンテーター：吉川あゆみ氏(関東聴覚障害学生サポートセンター)

- 討論の柱 ① 聴覚障害当事者からの提言等をもとに、高等教育機関に求められる支援について議論し整理する。
- ② 聴覚障害学生支援の質を高めるために、支援担当者が学生の支援活動を「見守る」ことを超えてすべきこと、できることを再検討する。

企画趣旨

聴覚障害学生支援制度を構築していくにあたっては、学内外からの支援者の確保が欠かせない。支援制度を構築する初期の段階では、何らかの情報保障をすべての授業でつけられるようにすることが当面の目標となる。その際に、コーディネートをはじめとする日々の制度運営を学生が中心となって担う大学も多々見られる。「学生の自主性を尊重する」という名目のもとに、学生による支援活動を「見守る」ことで制度が機能している例もあろう。

しかしながら、単に情報保障が必要なコマに支援者を配置し、学生による支援活動を見守っていただけでは、高等教育機関として適切な支援を行っているとは言い難いことは、これまでも当事者から繰り返し指摘されている。支援の質の向上のためには、学生による支援の特長を活かす一方で、学生による支援から脱却していくこともまた求められてくる。すなわち、支援担当者が聴覚障害学生の潜在的なニーズを把握し、支援に対する明確なビジョンを持ち、将来を見据えた教育的視点を持って支援していくことが不可欠となる。そうして初めて、学生の活動を見守りつつも主体的な関わりをしていくことが可能になるのではないだろうか。その結果、目指すべき支援の水準をモニタリング・維持していくことや、聴覚障害学生・支援学生双方が良好な関係性を保つこともスムーズになる等のさまざまな波及効果ももたらされよう。

しかし、こうした「見守る支援」から主体的な関わりに移行していくにあたっては、支援担当者が

何をどこまでしなければならないのか？どのように行っていくことができるか？等の疑問や悩みも生じることであろう。そこで本分科会では、一歩進んだ関わりを目指す支援担当者を主な対象として、高等教育機関としてあるべき聴覚障害学生支援とは何かを整理し、支援担当者が担うべき役割について再考したい。まず、聴覚障害当事者の提言をもとにそのニーズや真に求められる支援を明確にする。そして、参加者に事前に作成していただく「業務ワークシート」に基づいてグループで議論を行なう。議論や情報交換を通して、参加者それぞれが、ワークシートに表現された「現在の自分」から、次のステップとして目指す「一歩進んだ支援担当者像」を構築する機会としたい。あわせてシンポジウム後も日々の業務で相互に相談できる担当者同士のネットワーク構築に役立てていただきたい。

※本分科会は、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)コーディネーター連携事業で実施された「大学および短期大学における障害学生支援担当者の業務内容・専門性に関する実態調査」の成果をもとに実施する予定である。